

## 今月は年度成果報告

- ◆平成19年度・研究所の活動
- ◆河畔林に息づくさまざまな昆虫
- ◆上～中流の河辺の木々 ― 大きなつぼの河畔林 ―
- ◆川辺の村々の暮らし ～河畔林整備基礎調査から
- ◆アユの大量遡上をもたらしたのもの  
～大量遡上したのに釣れないのはなぜか?～
- ◆ドキッ!? 復活 カワヒバリガイ
- ◆表紙の写真
- ◆第13回 豊田市矢作川研究所シンポジウムが開催されました

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

e-mail yahagi@yahagigawa.jp

Rio

<http://yahagigawa.jp>

2008.3 No.117

## 平成19年度・研究所の活動

悠久の昔より流れる矢作川。その矢作川から豊田市は大きな恩恵を受けて成長してきました。豊田市矢作川研究所は、創設当初からその矢作川と向き合い、調査研究を通じて対話を試みてまいりました。ここでは今年の研究成果の一端をご紹介しますと思います。

豊田市矢作川研究所の研究活動としては、設立以来矢作川を遡上するアユの調査が一つの柱となっております。昨年は平成10年の遡上調査開始以降最多のアユの遡上が確認されました。ただ地元太公望を喜ばせたのもつかの間で、中流域のアユのサイズは小さく、不漁の年と位置づけられました（山本研究員）。また数年前からカワヒバリガイという特定外来生物の繁殖が確認され、その幼生のモニタリングを実施しております。幼生は中流域の笹戸発電所から扶桑町の間で確認され、生息密度が8月中旬に最大となることがわかりました。幼生の発生量は川底などの石に付着する幼貝量に関連するのではないかと考えモニタリングしています（内田・白金研究員）。これらのことは、川とそこにすむ生物が、現在かかえている問題を浮き彫りにすると共に、生物の動向を的確に把握していく必要性を物語っています。

川の変化は河畔にも現れています。河畔には後継樹を欠くアラカシ・アベマキ・ケヤキやエノキなどの大木が繁茂し、その中にシデコブシなどの稀少種も生育していることが確認されました。これはダムによる河川の攪乱が減ったため成立したと考えられます（洲崎主任研究員）。その河畔林には、多数の昆虫類が生息し、オオムラサキなどさまざまな稀少種も発見されましたが、竹林での生息種や、河畔草原で本来生息したであろう種が貧弱であることもわかりました。河畔林の発達と共に、そこを生息の場とする昆虫類が増加し、種構成も変わってきたことを物語っています（間野）。

現地での聞き取りの過程で、明治時代に梁の様子を克明に記録した資料が見つかり、そこからは川と密接に関わる生活を読みとることが出来ます（高橋研究員）。過去には、川や流域の人の暮らしはどうであったか、聞き取りや資料によって明らかにすることは、私たちが次の世代にどのような川の姿を引き継いでいくかを考える重要な手がかりとなります。過去の川の姿を踏まえ、現在の川を調べてその結果を直視するところから、未来への川づくりは始まることを感じます。

以上のような研究所単独で行う研究のほか、研究所では森林や水産、環境等の関連する諸団体と連携した事業も行い、各種学会の事務局等の仕事にも尽力し地元での交流も深めました。またこうした研究活動のほか、矢作川「川会議」という矢作川に関わる諸団体によるいい川作りについて考える会や、「矢作川学校」という矢作川の環境を担う次世代育成のための講師派遣・各種行事を実行する委員会の運営にも携わっています。第7回目の開催となった今年度の矢作川「川会議」は『市民が描く矢作川―河畔林を考える―』をテーマとして開催され、210名が参加しました。今年度「矢作川学校」は、2月までに28回開催され延べ102名の講師を派遣し1,348名の方にご参加頂きました。

その様な活動の中、今年度は5月に田中蕃氏が、12月に今井勝美氏という、研究所発足当初よりご指導いただいたお二人が相次いで亡くなり、非常に悲しい思いを致しました。あらためてご冥福を祈りたいと思います。ただ、4月には秋篠宮殿下が研究所をご訪問され、研究活動に関するご指導が受けられたことは大変励みとなりました。私どもはこれからも流域住民の方と協力しながら、矢作川の自然環境をよりよくしていくことに貢献できればと願っております。

（間野 隆裕、総括研究員）

# 河畔林に息づくさまざまな昆虫

○矢作川の河畔林には多くの昆虫が生息し、竹林より広葉樹林に多い傾向がありました。

○丘陵地などで見られる木本食いの種が非常に多く、氾濫環境に生息するであろう種がわずかであることがわかりました。

豊田市内を流れる矢作川は河畔林が発達し、中でも竹林が我物顔で繁茂しています。その河畔林を整備するための基礎的資料を得る目的で、越戸ダムから矢作ダムまでの区域内で、昨年度から今年度にかけての約1年間、生息動物について調べました。現在その結果を取りまとめ中ですが、ここでは速報として昆虫類についてご報告します。

昆虫類は主に5地点の河畔林を、昆虫各分野に精通した調査員の協力を得て調査しました(図1)。見つかった昆虫はガ類が919種と最も多く、コウチュウ目が578種など2,176種を記録し、稀少種もいくつか見つかりました(表1)。地点別では(e)地点が1,159種と最も多く、(c)地点が643種と最も少ない状況でした。記録種数の多かった(e)地点は、発達した竹林の中にアベマキなどの高木が点在し、その脇の鉄道沿いの草地と畑地・果樹園などの農地がありました。また(a)地点はケヤキ林の脇に果樹園や畑地・水田が作られていました。両地点ともその農地や草地で繁殖したと考えられる種類も記録されましたし、アベマキなどの腐った木で発生したノコギリクワガタが一度に多数記録されたり、ケヤキ食いの種類が多く飛来するなど、その環境をかなり反映していると考えられました。(c)地点は、昆虫類があまり繁殖しないモウソウチク林で、そのことが記録種数の少なくなった大きな原因の一つと考えられます。一方各地点を通じて、かつて河川草原で生息していたチョウの一種などは見られず、わずかにハンミョウの一種が砂州で生息して

いるなど、氾濫環境特有の昆虫が少ないことがわかりました。

多数の種を確認したガ類で、その食べている餌を調べたところ、

木を食べる種が約50%以上と、どの地点でも草を食べる種の割合を大きく超えていることがわかりました(表2)。その中にドングリを作るブナ科樹木を食べる種は59種みられました。ブナ科樹木は、矢作川が氾濫を繰り返している時代には河畔にあまり繁茂しなかったと考えられ、ブナ科樹木を食べる虫の多くは河畔林の発達とともに増えていったと考えられます。

その河畔林の発達には河川の氾濫の影響が深く関わっていると考えられますが、昆虫相にどのような影響があったかなど、これまでの結果を踏まえダムの上下流での比較調査が必要と考えています。

(間野 隆裕、総括研究員)

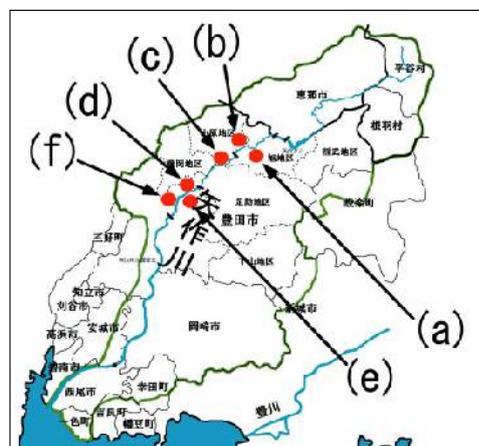


図1 調査地点

表1 地点別昆虫類記録種数

地点	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	計	稀少種等
コウチュウ目	265	240	150	195	258	578	シマゲンゴロウ(県準絶滅危惧)
チョウ類	36	37	17	35	41	50	オオムラサキ(国・県準絶滅危惧) ホシミスジ(県絶滅危惧Ⅱ類)
ガ類	459	370	271	263	494	919	スカシカギバ(県情報不足) ヒロヘリアオイラガ(外来種)
カメムシ目	102	114	64	122	150	232	オヨギカタヒロアメンボ(国絶滅危惧Ⅱ類)・コオイムシ(国準絶滅危惧) ヒメタイコウチ(県準絶滅危惧)
トンボ目	29	25	39	23	32	50	キイロヤマトンボ(国県準絶滅危惧)・コンボノヤンマ ホンサナエ(県準絶滅危惧)
バッタ目	36	38	17	21	38	61	
ユスリカ類	38	37	11	20	26	65	
ハエ類	11	17	0	20	25	44	
トビケラ目	49	36	19	36	42	66	
トビムシ目	28	30	34	31	30	54	
アリ類	18	20	20	22	16	36	
ハチ類	5	4	1	6	7	21	ウマノオバチ(県準絶滅危惧)
総計(美種数)	1,076	968	643	794	1,159	2,176	

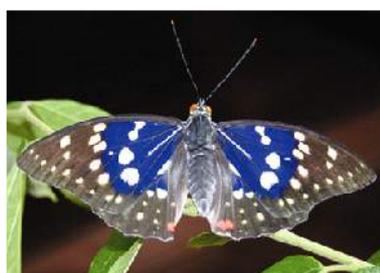


図2 数地点で記録された準絶滅危惧種のオオムラサキ

表2 ガ類記録種の地点別食性割合(食性判明種のみ 単位は%)

地点	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	
種子植物	草本食	29.4	22.8	19.1	23.2	26.0
	木本食	53.2	57.3	56.8	49.8	54.6
その他	シダ	0.6	0.7	0.5	1.0	1.1
	蘚苔類	7.6	8.6	9.8	10.3	6.8
	地衣類	7.6	8.6	9.8	10.3	6.8
	枯葉	5.4	6.7	8.7	8.9	6.6
	肉食	0.0	0.0	0.5	0.5	0.0
その他	3.2	2.6	3.3	4.4	3.8	

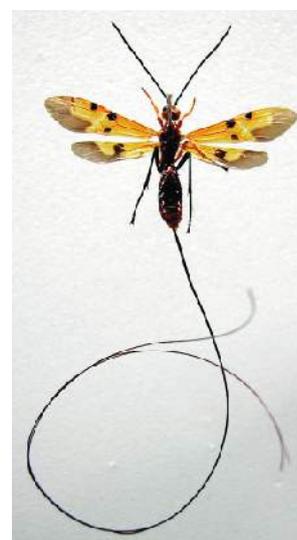


図3 非常に長い産卵管を持った準絶滅危惧種のウマノオバチ

# 上～中流の河辺の木々 — 大きなのっぽの河畔林 —

- 新しく豊田市になった地域を含む矢作川の上～中流には、ケヤキやアベマキの高木林、シデコブシの湿生林など、保全が望ましい河畔林があることがわかりました。
- 矢作川の上～中流の河辺の後継樹を欠く高木林の成立には、矢作ダムをはじめとしたダム群による流量の調整が関わっている可能性があります。

2005年、豊田市は上流の6町村を合併し、岐阜・長野との県境に達する広い市になりました。旧市域の中心市街地では既に矢作川の河辺の動植物調査が行われ、望ましい管理や整備の際に配慮すべき点についての提案が示されましたが、越戸ダム（河口から45km）堰堤より上流では、河辺にどのような生物がいるか調べられていませんでした。そこで、河辺の自然環境の保全や改善につながる管理と、環境に配慮した河川整備に役立つデータを得るため、矢作川の河口から45～70kmの範囲で河辺の動植物を調べました。調査にあたっては、特に整備の際に配慮が必要とされたと考えられた河畔林や広い面積を占める竹林など、この範囲の代表的な植生を11地点、調査地として選びました。ここでは植生に目立って特徴があった3調査地の植生調査結果の一部をご紹介します。調査地の位置は左ページの図1をご参照下さい。

(a)大きな岩の上に成立している高さ20mを超えるケヤキの大木の林です。サイカチ（県絶滅危惧Ⅱ類）やニガキ、エノキの高木が混ざっていました。林内にはヒメウツギやヤブツバキなどの低木がまばらに見られ、上流側はモウソウチク林になっていました。

(b)河岸から10～20mの範囲に高さ約15mの林がありました。川側はコナラ、アラカシをまじえたアベマ



図1 調査地(a)のケヤキ林

キ林、堤防側がヒノキの人工林でした。河原にはヤマハギやカワラハンノキなどの低木が生えていました。

(f)高さ約5mの湿生林で、シデコブシ（国・県絶滅危惧Ⅱ類）、サクラバハンノキ（国・準絶滅危惧）、カザグルマ（県絶滅危惧Ⅱ類）、ネズ（県準絶滅危惧）、

ヘビノボラズ（県準絶滅危惧）など多数の稀少種が確認されました。

護岸や水質浄化などの役割を果たすとともに、河辺景観の主役である河畔林の価値をまもり、高めるには、稀少な生物の保全や生き物の多様性の維持、樹木が世代交代できる体制の確保などが必要です。今回調査が行われたケヤキやアベマキなどの高木林には、跡継ぎとなる若木（後継樹）が見られませんでした。こうした後継樹を欠く高木林は、ダ

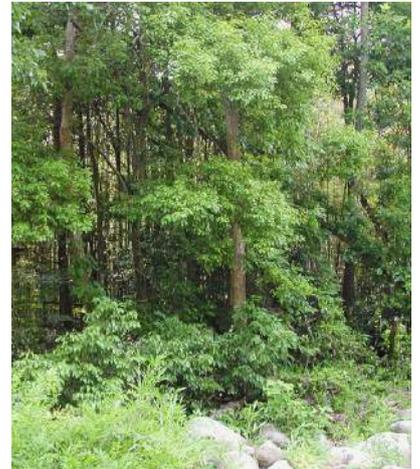


図2 調査地(b)のアベマキ林



図3 シデコブシ

ムにより攪乱が減ったために成立した林であると考えられ、人の手で後継樹を育成する必要があるかもしれません。ただ、中流域（越戸ダム下流）で見られたような、矢作ダム建造後の立地の変化と河畔林の成立といった現象は顕著ではなく、大正～昭和初期にかけて建造された他の小規模ダムも、今回調査対象とした高木林の成立に影響を与えてきた可能性があります。今回はこのような高木林のほかに、シデコブシなど多くの稀少種を含む湿生林及びそれに近いタイプの林、アベマキの若い林、マダケやモウソウチクの竹林や草地などが調査対象となりましたが、植生タイプ別に種組成と構造、立地の特性について解析を進めて、今後の望ましい管理手法を考えていきたいと思ひます。

（洲崎 燈子、主任研究員）

# 川辺の村々暮らし～河畔林整備基礎調査から

- 矢作川沿いの村々が、互いに協力しあいながら生活してきたことがわかりました。
- こうした関係が、今もいろいろなかたちで人びとの生活を支えていることがわかってきました。

川辺の村々を調査して、自然環境の変化と人びとの生活の変化を調査しています。自然環境が大きく変化すると、川辺の人びとの生活も大きく変化します。川辺の人びとの生活が変化すると、自然環境も大きく変化します。このようなキャッチボールが、矢作川の川辺でもずっとおこなわれてきました。

今回は、調査の中で、素晴らしい資料に巡り会えたことをご報告したいと思います。資料は、旧小原村、矢作川上流部右岸側の、築平地区からお借りできました。文書の中には、代官所との行政的なやりとりに関するものもあれば、村同士のちょっとしたやりとりに関するものもあり、正確かつ生活感あふれる資料群であるといえるでしょう。文書は全部で12箱あり、最も古いものは寛文4年（1664）にまで遡ります。

まず、築平村は、その名が示すとおり、もともと築を持っていました。築関係の資料は、特に明治時代のもものが豊富で、「漁築約定書（漁築設立の儀につき願書は築平村、池島村両村願の事等につき）」（明治11年＝1878）、「築場設置漁業願（官有字仲田矢作川通築場反別6反歩、従前耕地川成荒地の場所につき持主の者築取設漁業仕りたきにつき）」（明治12年＝1879）などがあります。

これらの資料から、築が、築平村と対岸の池島村とで共同管理されていたこと、築を設置する場所が、官有地と民有地にまたがっていたことなどがわかります。築の精密な図面も見つかっています。

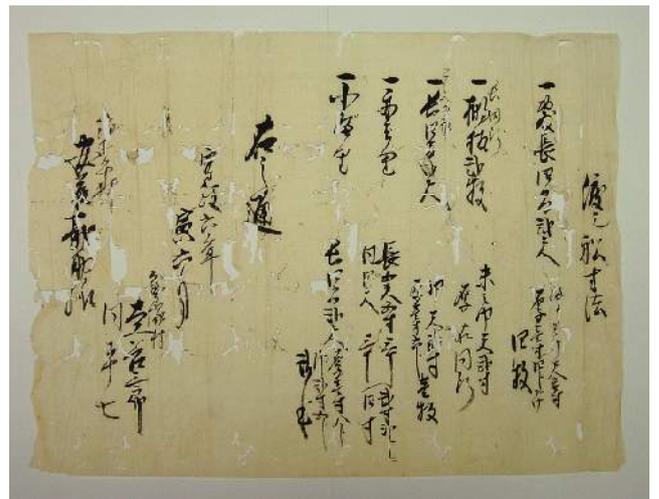
また、築平村には渡船場がありました。渡船場関係の資料は、かなり古いものから残っており、「覚（西三河加茂郡吉田領川西より川東村々へ此度新船造立により入用金の内半金指遣わす旨につき）」（元文3年＝1738）、「渡シ船寸法」（寛政6年＝1794、写真）などがあります。渡し舟を作るのに必要なお金は、近隣の村々から集められたことがわかります。船の寸法は、四間二尺（およそ7.9メートル）の長さということが記されています。

こうした資料からわかることは、村落研究ではしばしば、ひとつひとつの村は自己完結的な「小宇宙」であるように言われるものですが、実は全然そんなこと

はなく、村落同士が助け合ってさまざまなことを成し遂げてきた、ということになるのでしょうか。聞き取り調査からは、こうした助け合いやコミュニケーションが、今もなおたくましく息づいているのを見ることができます。

たとえばここ築平地区では、対岸の村落と共同で消防訓練をおこなってきました。もし火事があったとき、地形の入り組んだ山間部では、対岸からの方が発見しやすいからです。そして、そのためには、近年ダムなどの影響により勢いを増した、川辺の竹林などが邪魔になってきます。こうした障害物も、村落同士が協働して、伐採・整備しておられるということです。

現在、豊田市河川課を中心として、上流部の河畔林をどのように整備していくべきかというワークショップが開催されています。今、この場所をどのようにしていきたいかという人びとの思いは大変重要なものですが、中流域の愛護活動を見てもわかるとおり、このような活動は長く地元の人びとによって支えられていく必要があります。そのためには、上記のような、昔からの村落同士の関係の深さが重要となってくるのではないかと考えられます。



写真「渡シ船寸法」

※資料の収集、整理には、築平村の皆さま、豊田市史資料調査会の皆さまにご協力をいただきました。ありがとうございました。

（高橋 聡、研究員）

# アユの大量遡上をもたらしたものの ～大量遡上したのに釣れないのはなぜか～

- 2007年は関東から東海にかけての太平洋側で天然アユの大量遡上にめぐまれ、矢作川も平成10年以降で最も多い遡上数となりました。
- しかしながら中流域で釣れるアユのサイズは小さい上に、友釣りによる釣果も芳しくなく、2007年は不漁の年と位置づけられます。
- 矢作川本川にあるダム魚道の天然アユの成長も悪く、アユの生育環境にも何らかの問題が生じている可能性があります。

2007年に明治用水頭首工（左岸魚道）を遡上したアユの数は612万尾におよび、これは矢作川天然アユ調査会が調査を開始した1998年の335万尾を抜いて最も多い数となりました。伊勢湾に注ぐ長良川の河口堰で観測された遡上数も昨年の6倍と過去10年では2番目に多い数であり、また関東から東海にかけての太平洋側ではどこも今年は遡上がよかったといわれているので、今回の大量遡上は稚魚が冬期間を過ごす海環境条件が良かったためかもしれません。

しかしながら、この大量遡上は矢作川中流のアユ釣りには恩恵をもたらしませんでした。矢作川天然アユ調査会の友釣りによる調査によると、ここ4年間では最もよく釣れたと言われた2005年と比較して、釣果が3分の2となりました（図1）。また、釣れたアユの体長も過去3年間と比べて2～3cm小さく、釣り

人の中では「不漁の年」といわれるに至りました。

この点で気になるのは河川でのアユの生育です。ダム魚道を活用した実験水路において、1個体ずつ個別に飼育した天然アユの生育を調べた実験では、昨年度も成長が芳しくなかったと報告しましたが今回は3年間で最も悪い成長となりました（図2）。毎年のように出る川の濁りが例年と比較しても長くは続かなかった2007年のアユ釣り期間中、人工基盤についた藻類を食べられる条件にもかかわらずアユが成長しない時期が長く続きました。外見は健康そうにみえてもアユの健康状態あるいはエサ、水質等に問題があったのではないかと懸念されます。来年度はこの成長の遅滞が、何に起因しているか掘り下げるとともに、矢作川本川に生息するアユにどう関連するかをより深く探っていきたいと思います。（山本 敏哉、研究員）

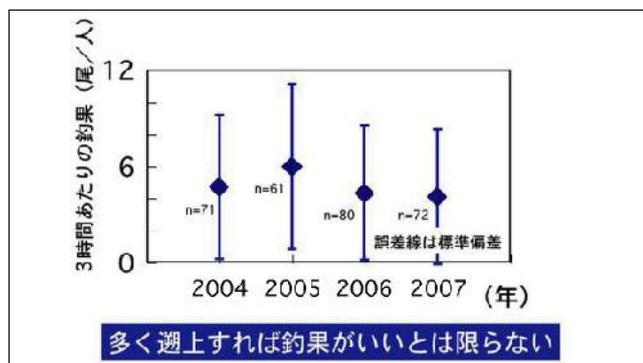


図1 過去4年間のアユの釣果

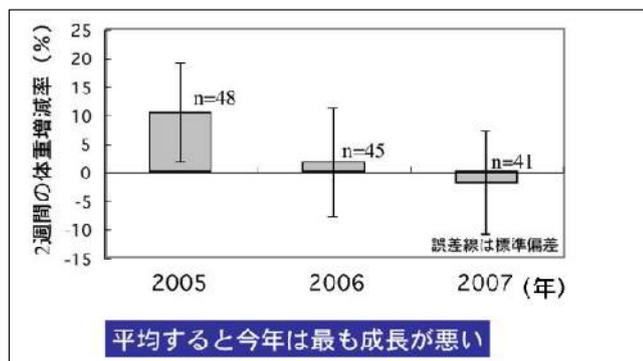


図2 ダムの魚道の実験水路におけるアユの成長



図3 実験に用いたアユ…2007年はこのような小さなアユが多く釣れました

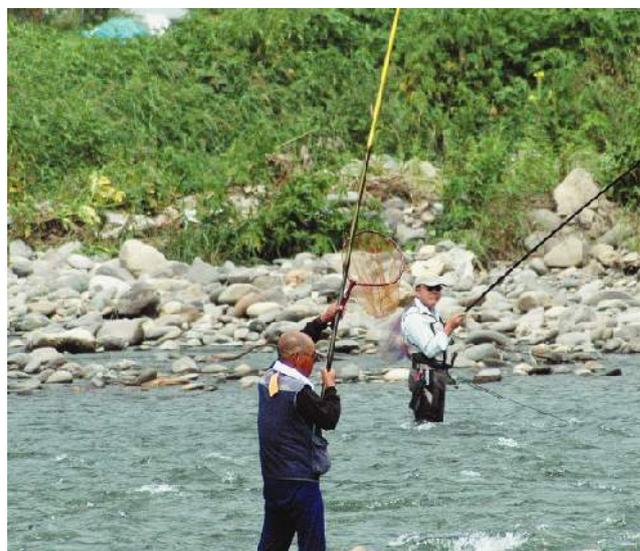
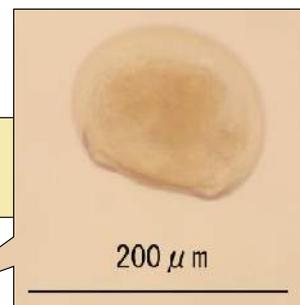


図4 アユの友釣り

# ドキッ!? 復活 カワヒバリガイ

写真2 カワヒバリガイのD型幼生

- 2005年夏から2006年夏にかけて大発生したカワヒバリガイが再び増えそうです。
- 発生量を予測するために幼生の調査と成貝の分布調査を続けています。



矢作川で2004年に日本で3例目として確認されたカワヒバリガイ(写真1)について、愛知工業大学の内田臣一准教授の研究室とともに調査を行い、これまで何度かRioでもとりあげ(No. 80/81, 86, 90, 93, 94, 103)、状況について逐次報告させて頂きました。2006年2月にはカワヒバリガイが特定外来生物に指定され、生きたまま川から持ち出す、飼育する、保管することなどが法律で禁止されました。

カワヒバリガイが大量に発生するとどのような問題が起きるのでしょうか。カワヒバリガイは堅い基盤に固着するため、上水道や水力発電所など利水施設の水路や管に多数の個体が固着すると水が通りにくくなるだけでなく、貝が死んで腐敗すると悪臭が発生する、水質が悪くなるといった事態が起こります。試験的には、貝が嫌う薬品を混ぜた塗料を壁面に塗る、幼生の発生した水を塩素処理する、電気パルスなどの方法が用いられています。矢作川の水は飲料水や農薬用水として利用されているので、薬品などを使った駆除はできません。決め手となる駆除対策はなく、現実には毎年、利水施設の水を切って乾燥させ死滅させたり、人力で付着した貝を剥がしたりしています。このような作業費もさることながら、カワヒバリガイ除去のため一定期間、利水が妨げられることで、関係機関は多大な経済的被害を被っています。

そこで矢作川研究所では、事前にカワヒバリガイの発生量を予測し、利水機関へ連絡することはできないかと考え、貝の生活史に目を向けました(図1)。文献によるとカワヒバリガイの繁殖、放卵と放精は水温

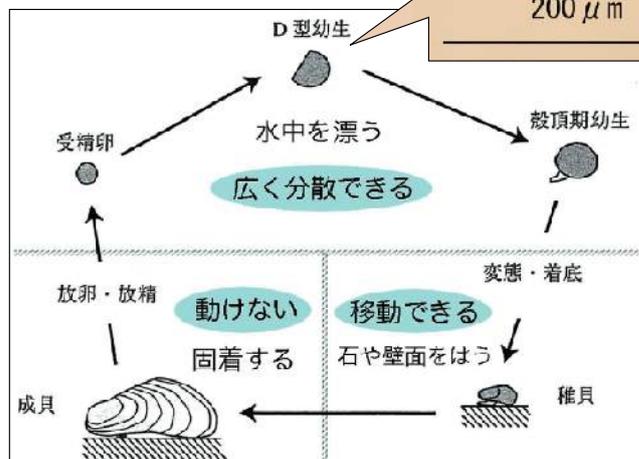


図1 カワヒバリガイの生活史(中井 2001を改変)

21~27℃の時期に行われます。受精卵はD型幼生(写真2)となり、1週間ほど水が貯まった環境で泳ぎ廻った後に付着します(小島 2007)。矢作川の水温変化からみて、矢作川での繁殖は6月~9月に起こっていると推定されます。この時期、河川水中にどの程度の幼生が発生しているかをモニタリングすることで、その後の付着状況を予測できるのではないかと考えました。

幼生の調査は2007年7月から9月にかけて、矢作ダムから古巣水辺公園の区間、4ヶ所の調査地点を設けて行いました。各調査地点で、2トンの河川水(矢作ダムは湖水)をプランクトンネットで濾過し(写真3)、採集した幼生を試料としました。試料を室内に持ち帰って、幼生の個体数を計数したところ、幼生は笹戸発電所下流から古巣の区間で確認されました。幼生の発生量は8月中旬に最大となり、矢作第二発電所下流(池島)で876個体/トン、古巣で1,768個体/トンでした(図2)。その後の2008年1月には越戸ダム導水路内で、多数のカワヒバリガイ稚貝(殻長5mmほど)が付着していました。

カワヒバリガイの発生量予測を行うにあたっては、幼生の発生量と貝の付着状況を関連させてモニタリングすることが必要です。カワヒバリガイの主な繁殖地は湖や貯水池など止水環境であると想定されています。大発生が問題となった2004-2005年は、越戸ダム(三水湖)が浮遊幼生の大発生源であった可能性が指摘されています。2006年1月の越戸発電所導水路の壁面にビッシリと1-2cm程度のカワヒバリガイが付着し



写真1 足糸を出し、石や壁面、貝同士で頑丈に固着するカワヒバリガイ

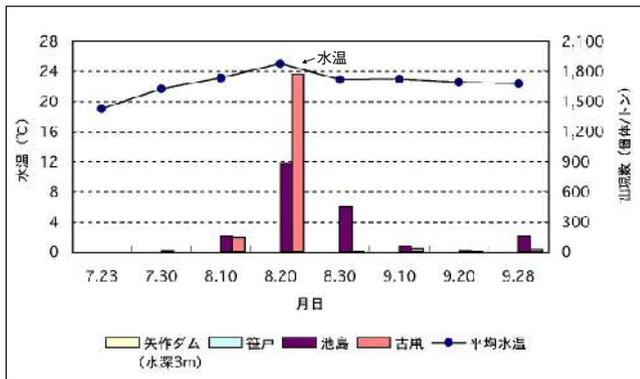
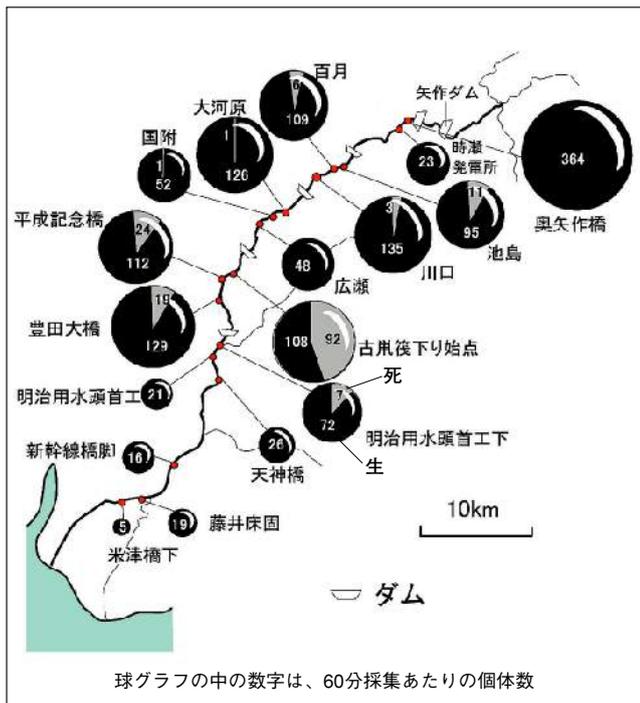


図2 各調査地点における幼生の発生状況 (2007年)

ていたことから (写真4上)、2005年の夏に多くの幼生が発生していたことが容易に想像できます。一方、2006年晩夏に大量死した後の2007年3月は、壁面に2cm前後の口を開けて死んだ状態のカワヒバリガイ成貝が大量に付着しており (写真4中)、稚貝はほとんど見られなかったことから、カワヒバリガイの幼生はあまり発生しなかったことが予想できます。

2007年6月の矢作川における成貝の分布をみると (図3)、2005-2006年の分布調査ではほとんど生息が確認されなかった奥矢作橋の生息密度が最も大きいことから、矢作ダムおよび矢作第二ダムにおける浮遊幼生の発生状況が気になります。来年度は今年度と同じ地点でカワヒバリガイ幼生の調査を計画していますが、今年度、9月末でも幼生が発生していたことから、調査時期を延長する予定です。また、ダム湖内では浮遊幼生の生息密度を把握することに加え、湖内に付着盤



球グラフの中の数字は、60分採集あたりの個体数

図3 矢作川におけるカワヒバリガイ稚貝・成貝の分布状況 (2007年6月)



写真3 カワヒバリガイ幼生の調査風景

を設置し、カワヒバリガイの付着状況もモニタリングする予定です。

(内田 朝子・白金 晶子、研究員)

文 献

- 小島貞男 (2007) 水質問題なんでもQ&A第14回 二枚貝カワヒバリガイによる管路閉塞. 用水と廃水, 49: 474-475.
- 中井克樹 (2001) カワヒバリガイの日本への侵入. 黒装束の侵入者—外来付着性二枚貝の最新学, 日本付着生物学会 (編): 71-85. 恒星社厚生閣, 東京.

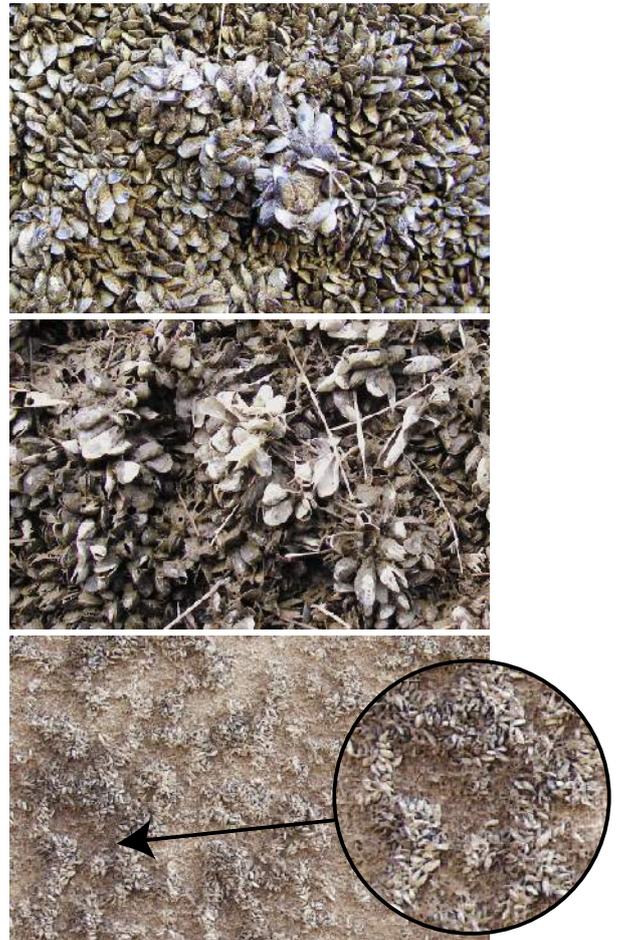


写真4 越後発電所導水路の壁面に付着したカワヒバリガイ (上: 2006年1月、中: 2007年3月、下: 2008年1月)



## 表紙の写真

# シマヘビ

春先暖かい雑木林を歩いていると、足下で動くシマヘビを発見。暖かい日差しの下、日向ぼっこをして体を温めていたのを邪魔してしまったようだ。しばらく観察していると、こちらを警戒しつつゆっくり枯葉の中に消えていった。

2007年3月15日 豊田市東広瀬町  
(間野隆裕 撮影)

## 第13回 豊田市矢作川研究所シンポジウムが開催されました

今年度の研究所シンポジウムは1月31日(木)豊田産業文化センターで、「川に生かされ、川を生かすまちづくり」をテーマに開催しました。豊田のまちなかの自然の現状とその存在意義を再認識し、川の自然をまちに引き込む工夫をこらして住む人の心に潤いを与え、訪れた人の心を癒す自然の豊かなまちづくりを進めるにはどうしていけばいいか考えました。基調報告では、愛知教育大学の和田道雄教授から豊田市の市街地一帯でヒートアイランド現象が悪化していることと、矢作川に沿った風の動きを生かした都市計画の重要性が詳しく説明され、続いて矢作川研究所の間野・洲崎研究員より中心市街地の野生生物の生息状況について紹介されました。その後のパネルディスカッションは関西学院大学の古川彰教授をコーディネーターとして

進められました。パネラーの豊田市都市計画課の羽根博之課長からは豊田の緑の基本計画の概要が説明され、大和田教授からは3次元的に緑を増やすことの大切さと、まちの「川の道」「緑の道」「風の道」を一体化させることの必要性についての提言がありました。見ノ口公園愛護会の成瀬順次氏からは住民主体の自然公園の管理について楽しい体験談が語られ、洲崎研究員からは行政と市民の協働で緑化を進めるのが理想的との意見が出されました。これから中心市街地に矢作川の水と緑を引きこむためにどんなまちづくりを進めていくべきかという点に関し、活発な議論が行われました。



## 後記

今回は所員の研究の成果報告となりました。わずか1ページ程度とはいえ毎年読者のみなさまに我々の研究成果を紹介していくことは容易ではありませんが、エッセンスを凝縮した報告を読んで研究の進捗をつかんでいただければ幸いです(山)。